



いしかわ
百万石
文化祭
2023



農業遺産シンポジウム

地域資源を活用した農業遺産地域の
さらなる活性化に向けて

農業遺産 シンポジウム

令和5年11月10日(金) 13:30~17:00

和倉「あえの風」1階フェスティバルホール
温泉 (石川県七尾市和倉町和歌崎8の1)

[主催]「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会、
能登地域GIAHS推進協議会

[共催] 国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわ
オペレーティング・ユニット、農業遺産認定地域連携会議

[後援] 農林水産省

開催記録誌

農業遺産シンポジウム概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

開会式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

基調講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

農業遺産認定地域の高校生による取組発表・・・・・・ 18

パネルディスカッション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

閉会式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

歓迎レセプション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

エクスカージョン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

制作物・配布物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

メディア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

INDEX

農業遺産 シンポジウム

～地域資源を活用した農業遺産地域のさらなる活性化に向けて～

令和3年の「世界農業遺産国際会議2021」において、国内の世界農業遺産認定地域と日本農業遺産認定地域が連携を強化することを確認したことをきっかけに、国内の世界農業遺産と日本農業遺産の全ての認定地域が加入した「農業遺産認定地域連携会議」が新たに発足することから、連携の一環として関係者が一堂に会するシンポジウムを開催しました。

2023年
11月10日(金)
13:30～17:00

和倉温泉
「あえの風」
1階 フェスティバルホール
(石川県七尾市和倉町和歌崎8の1)

[大会参加者数]
220人

[主催] 「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会、能登地域 GIAHS 推進協議会
[共済] 国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット
農業遺産認定地域連携会議
[後援] 農林水産省

13:30～14:05 開会式

14:05～14:30 基調講演



「地域資源を活用した 地域活性化の取組」

渡辺 綱男氏

(国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・
かなざわオペレーティング・ユニット所長)

14:30～14:45 休憩

14:45～15:30 農業遺産認定地域の高校生による取組発表

15:30～16:30 パネルディスカッション



「農業遺産認定地域が もつ魅力と価値」

▶コーディネーター

小谷 あゆみ氏 (農ジャーナリスト)

▶パネリスト

山本 亮氏 (株式会社百笑の暮らし代表取締役)

今野 正明氏 (山形県紅花生産組合連合会副会長)

島田 由香氏 (一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会代表理事)

16:30～17:00 閉会式

11月11日(土)
8:30～

エクスカーション

[奥能登コース]

奥能登の農林水産業と文化

[中能登コース]

中能登の農林水産業と文化

PROGRAM

開会式

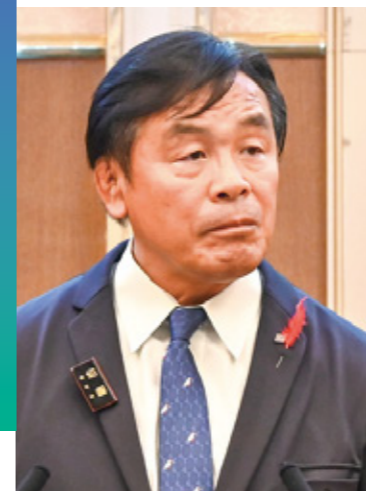


アトラクション



シンポジウムの幕開けを飾ったのは、全員女性の創作太鼓チーム「高階くれない太鼓」(七尾市)。勇壮な響きに来場者の注目が集まりました

主催者あいさつ



「能登の里山里海」
世界農業遺産
活用実行委員会会長
石川県知事

馳 浩

皆さん、こんにちは。よかったですね、今の高階くれない太鼓。やっぱり、能登の女性の皆さんのこの風土に耐えてきた強さというのがこういった芸能に表れるんだなというふうに思いました。

農業遺産のシンポジウムでございます。今日は農水省から高橋政務官にもおいでいただき、ありがとうございました。そして私の国会議員時代の盟友の高井美穂さん。政党は違いましたが、今日わざわざ徳島から来ていただき、ありがとうございました。今日、全国からこの七尾にお見えをいただいたことに感謝申し上げます。すでに世界農業遺産も日本農業遺産も私が解説することはございません。私がひと言、申し上げるとすれば、こうした風土に我々人間の営みを合わせていかざるを得ない、環境に私たちが合わせていかざるを得ない時に、どれほど先人がご苦労をなさってきたかと同時に、生きていく上でのご苦労が長い年月を経てひとつの文化にまで昇華されてきたという個々の人の営み、そして稲作を中心としておりますが、みんなが協力し合うコミュニティ文化が成立をし、それがいかに今日まで継承されてきたのかと。そのことを将来に引き継いでいくということが課題だと思います。皆さん、こちらの「あえの風」の玄関をお入りになった時に気がついたと思いますが、目の前にトキが5羽、日本画が掲げられておりました。ぜひ皆さんもお帰りの際にご覧いただきたいと思っております。能登の皆さんのそういう優しい心遣い、おもてなし、まさしく自然と風土との向き合い方そのものであると思っております。今日、専門の先生方のシンポジウムもございまして、国連大学にもたいへんお世話になりましてありがとうございます。ぜひ、このシンポジウムをきっかけに次の時代へとつないでいていただきたいと思っております。我々は早ければ3年後にも能登でトキを放鳥したいと準備を進めておりますので、今回のシンポジウムはその一環でもございまして、改めて環境と農業、あるいは経済との融和を求めていくということを石川県政においても柱にしております。どうぞ有意義なシンポジウムとなりますように、そして何よりも高校生の皆さんが今回参加をいただいているということに意味がございまして、是非とも皆さん方の力を結集していただきたいと思っております。どうぞ、最後までよろしくお願いいたします。

OPENING



農林水産大臣政務官

高橋 光男様

本日ここに農業遺産シンポジウムが盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げたいと思います。また、先ほどご挨拶されました「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会の会長でもある馳浩石川県知事はじめ、本日ご参集の関係者の皆様方による日頃からの農林水産行政に対するご理解ご協力に対して心から御礼を申し上げたいと思います。

世界農業遺産は伝統的な農業農林水産業の特徴ある農法や文化、景観等を次世代に承継していくことを目的として、2002年にFAO、国連食糧農業機関が創設したものでございまして、現在、世界26カ国、86地域が認定されているところでございます。私の地元兵庫県の美方地域と埼玉県武蔵野地域が今年7月に新たに認定をされまして、日本国内の認定地域は計15地域となりました。これは世界でも2番目に多い認定数となっております。いっぽう、日本農業遺産につきましては、制度創設以降、認定地域が24地域に広がっているところでございます。この会場は一昨年にも「世界農業遺産国際会議2021」が開催されたと承知しております。この地で再び農業遺産地域が一堂に会し、シンポジウムが開催されることは全国の農業遺産の活性化にとってもたいへん重要であり、また石川県の取り組みに対して深く敬意を表したいと思います。また本日、新たに「農業遺産認定地域連携会議」が発足し、認定地域が協力して地域の魅力向上や認知度向上等の取り組みをこれからはなされるというふうにもお伺いしております。今後ますます有意義な活動が展開され、さらに農業遺産の価値が高まることを期待いたします。

さて、本日私はここに参らせていただく前にこの地域のシンボルでもございます白米千枚田を見学させていただきました。その圧倒的なスケールに驚くとともに、先人たちが作り上げてこられた景観を観光や棚田オーナー制度等のさまざまな手法を用いながら地域内外の人々の力によって今日まで守られてきたことにたいへん感銘を受けました。また、里山まるごとホテルの茅葺庵にも立ち寄らせていただきまして、地域ぐるみで地域外の方々との交流に取り組まれている現場にも触れさせていただきました。農村は高齢化、人口減少の課題に直面しておりますが、何百年もの間、守られてきた文化、

景観、生態系などを次世代に承継していくためには、その地域に住む人々だけではなく、地域外の方々にも様々な形で活動に参加していただき社会全体で守っていく必要がございます。農林水産省といたしましても世界農業遺産の価値を高め、国内外に普及、発展させるための尽力をこれからも続けて参りたいと思います。具体的には展示会等での広報や農業遺産を紹介する動画の作成、若年層を対象とした動画や漫画による教育、教材の作成等、情報発信に力を入れて参ります。引き続きこうした取り組みを通じて地域の支援を積極的に行って参る所存でございます。岸田総理は先日の臨時国会冒頭の所信表明演説におきまして、農政の基本は現場にあると述べられました。私自身、今日これからも各地域で農業を実践されている、この石川県の現場の皆様から多くのことを伺わせていただくために視察をさせていただき予定でございまして、しっかりとそうした現場の皆様の声に寄り添いながら農政を進めて参る決意でございます。結びに本シンポジウムを通じて農業遺産に対する理解がさらに深まるとともに、各地域における取り組みのいっそうの発展と活性化が図られることを心から祈念いたしましてお祝いのご挨拶とさせていただきます。



本日は農業遺産シンポジウムご開催、誠にありがとうございます。また高橋農林水産大臣政務官をはじめ、ご来賓の皆様、そして関係者の皆様には全国からこの能登の地にお越しをいただき、心から歓迎を申し上げる次第でございます。本来であれば焼田宏明県議会議長が皆さんの前でご挨拶を申し上げるべきところではありますが、公務が重なり出席が叶いません。祝辞を預かって参りましたので代読をさせていただきます。

農業遺産シンポジウムが開催されるにあたり、石川県議会を代表いたしましてお祝いを申し上げますとともに、全国各地からお越しの皆様を心から歓迎いたします。農業遺産は社会や環境に適応しながら何世代にもわたり継承されてきた伝統的で独自性のある農林水産業のシステムであり、我々が誇るべき宝であります。石川県においても2011年に「能登の里山里海」が国内初の世界農業遺産に認定され、その効果は農林水産業以外のさまざまな分野にも波及し、地域全体の活性化につながっております。今回のシンポジウムでは国内の世界農業遺産認定地域と日本農業遺産認定地域の全てが加入した「農業遺産認定地域連携会議」が新たに発足されたとお聞きしており、それぞれの取り組みを学び合い、互いに切磋琢磨し、その魅力や価値の幅広い発信や認定地域のさらなる活性化につながっていくことを大いに期待しております。

結びに今回の開催にご尽力をいただきました関係各位に改めて感謝の意を表しますとともに、本日出席の皆様方のご健勝とご多幸を心からご祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。令和5年11月10日 石川県議会議長 焼田 宏明。代読でございます。本日は誠にありがとうございます。

来賓あいさつ



石川県議会副議長
平蔵 豊志様

開催地歓迎あいさつ



能登地域G I A H S 推進協議会会長
七尾市長
茶谷 義隆様

本日は全国から本当に多くの方々にこの七尾市和倉温泉にお越しいただきまして誠にありがとうございます。

今回の開催にあたりまして、馳知事をはじめ関係者の皆さま方には、この七尾市和倉温泉を選んでいただきまして誠にありがとうございます。先ほど表のパネルをたくさん見させていただいたんですけども、実は私、関西に長く住んでおまして懐かしい地域がたくさんございました。先ほどの丹波篠山であったり、但馬市という市があるんですけども、私はお酒の関係の仕事をしていましたので、杜氏の郷としまして丹波杜氏、但馬杜氏というのが有名でございます。また、和歌山県の方では海南、田辺地域というのがありましたし、住んでいたのが三重県ということなので鳥羽とか尾鷲の方であったりとか、本当に自然豊かないいところがたくさん日本の地域にはあるのではないかなというふうに思っております。先ほどありましたけども、世界農業遺産に初めてこの能登の地域が「能登の里山里海」ということで認定されました。里山里海を守る、その中で、やっぱり豊漁とか豊作を願うのにはお祭りっていうのが欠かせないんですね。この能登の地域はたくさんの祭りがあります。持続可能という話がよくあるわけなんですけども、この能登の地域は能登国立国1300年を超える歴史があります。そういう中でずっと先人たちが培ってきた農法、自然に優しい継続していけるような農法が受け継がれてきたのではないかなというふうに思っています。これらを私たちがまた後世に残していく、子や孫の世代に残していく、そういうことが大事なのではないかなというふうに思っております。先ほど馳知事からもお話がありましたけれども、トキの放鳥が早ければ3年後に、この能登の地に放鳥される予定でございます。トキの放鳥が目的ではなく、トキが自然に生活できますというか生息できるような、そういうような地域をめざすというのがこの地域の目標でありますので、これからまた皆さん方と色々な知恵を出しながら日本の農業というものを守っていきたい、そう考えております。

最後になりますけれども、本シンポジウムが盛会に終わりますことと各地域の農業の益々のご発展、皆さま方のご健勝を心よりご祈念申し上げまして歓迎の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお祈りいたします。

「農業遺産認定地域連携会議」発足セレモニー

シンポジウム当日、国内全ての農業遺産認定地域が加入した「農業遺産認定地域連携会議」が新たに発足したことから、国内の世界農業遺産と日本農業遺産の代表者に加え、立会人として馳知事も参加し、発足セレモニーを執り行いました。

日本農業遺産認定地域代表



兵庫県丹波篠山地域
丹波篠山市農都環境政務官

清水 夏樹様

丹波篠山市の農都環境政策官をしております清水と申します。私は実は移住者であり、丹波篠山市に移住4年目の外から来た人、関係人口から定住人口になった人なんですけれども、実は丹波篠山市は最近社会増になっておりまして移住者がたいへん増えております。私も丹波篠山の環境と食べ物にもう胃袋をぎゅっとなつかまれてしまった人間の一人なんですけれども、この魅力、地域の気候風土、そして文化や歴史に基づく伝統的な農業、自然資源を循環的に活用する農法の価値を丹波篠山市はこれからも守り続けていきたいというふうに考えております。

丹波篠山市では日本農業遺産に認定された黒大豆、丹波黒の生産栽培はもとより、必ず豆と関連して作付けられるのがお米なんですけれども、そのお米、それから地域固有のお野菜などの生産においても産業としての活性化、絶対に必要です。それに加えて水や生物などの環境を守ることに力をいれております。最も特徴的なのが「農都のまほろば水路」と申しまして、多自然型工法の農業用水路の施工を標準工法にしていることです。農都というのは農の都と書くんですけれども、その農都丹波篠山、豊かな農の営みと実りを育む町というのが丹波篠山の目指す姿になっております。日本の美しい村、丹波篠山で農業遺産が市民の生活の一部となって、広く深く根付いていて、それを魅力に移住してくる人も増えてきているという姿を皆さんにお見せすることによって多くの農村部の力、勇気になるのではないかなというふうに私たちは思っております。

2025年の大阪・関西万博の開催に合わせて丹波篠山市では丹波篠山国際博というのを催します。この美しい日本の農村を国内外からのお客様に、農業遺産として認められた食文化とか景観とか自然資源、それから生物多様性、誇れる地域の魅力をお伝えするために今、市内の事業者様、団体、そして市民ひとり一人が準備を進めているところなんです。是非お越しいただきたいなと思います。皆様に本当に丹波篠山の魅力をお伝えしたいです。どうぞよろしくお願いたします。

世界農業遺産認定地域代表



徳島県にし阿波地域
三好市長

高井 美穂様

徳島剣山世界農業遺産推進協議会会長の徳島県三好市長の高井でございます。本日はこうした素晴らしい環境をセッティングしていただきました石川県馳知事をはじめ、世界農業遺産活用実用委員会関係各位の皆様にご心より感謝を申し上げたいと思っております。

私どもの暮らす徳島県西部の西にし阿波と呼ばれる2市2町の山間地域では、場所によって斜度40度にも及ぶ傾斜地を先人の知恵と技術で斜面のまま耕し、蕎麦などの雑穀や伝統野菜などを栽培する農法が大きな特徴でございます。地域特有の食文化を生み出すとともに山肌に古民家と農地が織りなす美しい集落景観を形成しています。この400年以上にわたり受け継がれてきた西「にし阿波の傾斜地農耕システム」が世界に類を見ない農法として平成30年3月に世界農業遺産に認定され、現在第2期保全計画に基づく取り組みを進めているところです。本日のシンポジウムには、この取り組みにも位置づけている西にし阿波地域の名人と呼ばれる方を取材し、記録、発信する聞き書き事業のほか、傾斜地農耕システムの科学的検証に取り組まれた当地域の高校、また私の母校でもあるんですが徳島県立脇町高校の皆さんも参加しております。今回、国内初の世界農業遺産認定地域の一つである石川県のこの地で、国内全ての農業遺産認定地域が連携をする「農業遺産認定地域連携会議」が発足するということは非常に意義深いものと考えております。いずれの地域も長きにわたり、継承されてきた独自の農林水産業と、それによって育まれた文化や景観などを保全し、未来へとつなぐため、工夫を凝らした取り組みがなされております。新たに発足したこの連携会議が全ての認定地域にとって互いの独自性を尊重しながら価値を高め合う素晴らしい機会となることをご祈念し、世界農業遺産認定15地域を代表してのご挨拶にかえさせていただきます。本日はおめでとうございまして。そしてありがとうございました。



国連大学サステナビリティ
高等研究所いしかわ・かなざわ
オペレーティング・ユニット所長

講師／渡辺 綱男氏

1978年、環境庁(現・環境省)に入庁。全国の国立公園、世界遺産やトキ、シマフクロウなどの希少種保全を担当。自然環境計画課長、審議官を経て2011年1月より自然環境局長。2010年10月に愛知県名古屋市で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)の準備事務局局長を務める。2012年11月より国連大学に勤務、2014年1月より現職。

地域資源を活用した地域活性化というテーマなんですけれども、今日は農業遺産の集まりということで、日本の農業遺産第1号の能登と佐渡に共通した大事な取り組みであるトキの野生復帰、知事や市長からお話が出ました。そのトキの話から始めてみたいというふうに思います。

これはトキが今まで確認された場所を地図に落としたものです。グレーのマルが確認の記録がある場所、大きい黒いマルは放鳥した場所になります。これを見ると大陸から日本列島に渡って、たいへんあちこちに幅広くトキはかつて生息をしていました。日本の中では昭和に入って、佐渡と能登と隠岐、この3つの地域に残されて、やがて佐渡1か所だけにトキが生息するようになったという歴史があります。

これは日本で最後に残った雄のミドリと雌のキンになります。1992年、私、環境省でトキはじめ希少種の担当になった最初の仕事がこのトキの関係でした。このキンは高齢の雌の個体、ミドリは雄ということで、中国の北京動物園にミドリを派遣して中国の雌とペアリングを試みたんですけど、3年試みたけれども願わず、そのミドリが日本に帰ってくる、そのミドリを羽田から佐渡まで送り届けるというのが私の最初の仕事、ミッションでした。その時、佐渡の飼育施設は山の上のほうにありました。清水平というところであって、ここに向かってミドリと林道を走って行きました。ライトバンで走って行きました。

この場所にはキンが飼育されていたという状態です。その時、山道をのぼっていて奇跡が起きました。まだまだ随分離れていたのにミドリとキンがお互いの存在に気が付いて、たいへん大きな声で2羽が鳴き交わした声が佐渡の山の中に響き渡りました。もう深夜12時を回ったぐらいの時間でしたけれど、その声を聞きながら3年ぶりのミドリとキンの再会に立ち会ってたいへん感動しました。

同時に、やがて日本からこのトキの鳴き声が聞こえなくなってしまうんだな、聞けなくなってしまう日が来るんだなという思いもこみあげてきました。

しかし、関係者はタスキをつないでいきました。1999年から中国にトキの個体を提供していただいて、2007年までに5羽、そして2018年にプラス2羽と、計7羽の提供を受けました。この中国から提供いただいた時から飼育施設で繁殖をしてトキの数を増やしていくという取り組みが進んでいきました。2008年、飼育しているトキが100羽を超えるところまで行って、いよいよ佐渡の空にトキを放鳥しようということになりました。2008年から毎年トキの放鳥を続けてきて500羽近くのトキを今まで放鳥を続けてきているということです。2008年に放鳥を始めて、それから3年から4年経って野外で卵を産むようになりました。

しかし、最初の2年は卵を産むんだけど、どうしてもその卵が孵らない、カラスに落とされてしまう。なかなかうまくいかない2年間で

した。私たち口には出さなかったんですが、トキの野生復帰は難しいのかなって、みんな思い始めていた2012年、3組のつがいが生んだ卵が孵化をして、ヒナが誕生して、そして8羽とも無事に巣立つということが実現しました。この2012年の夏に私は環境省を退職したんですけど、その直前、まだ環境省にいる時に38年ぶりの巣立ちに立ち会うことができました。私は居ても立っても居られなくなって、佐渡まで飛んで行って、この巣立った若ドリに出会った時の写真になります。

この野生下で孵化をして巣立ったことを豊岡、コウノトリの野生復帰を進めている豊岡の中貝市長がお祝いの電報を私に送ってくれました。今でも大事にしている電報です。一部だけ読んでみますけれど、長い絶望の時を耐え抜いて到達された快挙で、人とトキの歴史に新たな1ページが加わりました。小さな命を懸命に守ろうとする親鳥たち。トキが舞い、コウノトリが舞う豊かな日本再生への大きな一歩です。こんなメッセージを

地域資源を活用した 地域活性化の取組





いただきました。苦労を重ねてきた豊岡市の中貝さんからのメッセージだなというふう
に受け止めました。豊岡市ではコウノトリも
人の暮らしも、ということをキャッチフレーズ
にして環境と経済の両方を盛り上げていく、
そういった戦略を立てて活動を進めている、
そんな話を中貝さんから当時伺いました。

佐渡のトキになります。2012年初めて
野外で産まれました。そこから野外で産まれ
た個体がだんだん増えてきています。放鳥
した時の個体と合わせて一番上の赤い線
が野生の佐渡のトキの数になりますけれど
も、545羽まで増えていきました。それでは
このトキは佐渡のどんどこで見られるんだ
ろうかということになります。佐渡の中の中央
に広がっている平野部、平地部を中心にト
キが生息をするようになった様子が見えま

す。この星印が放鳥をしてきた場所になりま
す。この平地はどんな使われ方をしている
かということ、田んぼが広がった場所になり
ます。トキの餌の第1位は田んぼのどじょう、第
2位は畔のミミズ、そして田んぼや湿地のさ
まざまな水辺の生き物を餌にしています。で
すので、トキの餌が豊富に取れる田んぼ作
りってというのがトキの野生復帰には欠かせ
ないという関係にあります。

38年ぶりに巣立って佐渡に行った時に
農家の人たちとお話をしました。農家の人
たちの言葉でとても心に残っている言葉が
あります。飼育施設の中でトキを飼っている
時はトキのことは国や県がやっていることで、
自分たちとは関係ないと思っていた。でも自
分たちの田んぼの空をトキが舞うのを見て、
あるいは自分の田んぼの周りの畔にトキが

降りるのを見て、その瞬間気持ちが変わっ
た。トキも住める田んぼづくりを自分たちも立
ち上がってやろうというふうにしてその瞬間心
が変わったんだ、という話を聞かせてくれてと
ても心に残っています。こういったトキの餌
が豊富な田んぼづくり、認証制度が生まれ
ました。この地図で緑色の中で赤いのがそ
の認証米を作っている田んぼ。全体の4分
の1くらいの田んぼが認証米づくりの田んぼ
になっています。この認証の仕組み、トキの
放鳥を始めた2008年にこのお米の認証制
度もスタートした。

今、佐渡の市長をしている渡辺竜五さん
が当時、市役所の農林の課長でJAの皆さん
と議論を重ねて生み出した認証制度になり
ます。田んぼの横に深い江を作っていく、
あるいは冬に水を張る、あるいは水路から
田んぼに魚が上がる魚道を作っていく、
そういった生き物を育む農法を採用してい
る、そして年に2回生き物調査をして農薬や
化学肥料を減らして栽培をして、畔の除草
剤は使わないというような基準を作って認
証制度がスタートしたというものです。

その認証米づくりに取り組む農家の人た
ちの集まりが時々行われています。皆さんで
苦労を分かち合ったり、こういう工夫をし
たっていう経験を共有したり、トキにとって
いい田んぼだけはいかん、食べておいしい
お米にしなければいけないという話が出
たり。認証米を作るのはいへんだけれども、
子どもと一緒に生き物の調査をするのは本
当に楽しいなっていう声が出たり、そんな議
論がされていると聞いています。

これは佐渡でトキが季節によってどんな
場所で餌を取っているかということを示した
グラフになります。夏場は田んぼに稲が茂っ
てトキもそこでは餌を捕れなくなるというこ
とで、田んぼの周りの水路だったり、畔だつ
たり、農道だったり、あるいはその周辺の湿
地のピオトープだったり、そういう場所で夏
は餌を捕って、季節によって餌を捕る場所が

違ふし、食べる餌の種類も変わっている、そ
ういうトキの餌場の状況で、そんなトキの餌
の調査、年に2回田んぼの生き物調査とい
うのを子どもたちが行います。

その先生になるのが農家の人たち。農家
の人たちが先生になって田んぼの生き物調
査を行っているという様子です。そのトキの
取り組みを進めてきた佐渡ですけれども、能
登と同じ年、2011年に「トキと共生する佐渡
の里山」ということで世界農業遺産に認定
をされました。里山里海がつながりあった
佐渡、その中でいろんな農業、農林林業、漁
業、そして観光、いろんな営みが行われて
いる。佐渡ではそういった農業、林業、漁業、
観光、そして自然環境の保全、そういった活
動を結びつけることで佐渡をまるごとブラン
ド化していこうということに取り組んできて
います。去年2022年、佐渡は日本の中で先
駆けてネイチャーポジティブ宣言というのを
発信しました。自然の悪化を止めるだけでは
なくて、むしろもっとよくして回復に転じさ
せる佐渡にしていくんだっていう宣言です。こ
れは昨年12月にカナダのモントリオールで12
年ぶりに新しい生物多様性の世界目標が
合意をされました。

新しい世界目標の中で自然の悪化を止
めるだけではなくて、流れを逆転させて回復
の軌道に乗せていくということが位置づけら
れました。それが広くネイチャーポジティブと
呼ばれるようになった。そのネイチャーポジ
ティブの地域づくりをいち早く佐渡は宣言を
したということになります。そういった宣言も
受けて里山里海の保全管理のモデルを佐
渡から発信していこう、そのことによって里
山里海の地域の活性化を図っていこうとい
う取り組みが進んでいる、そんな佐渡の状
況をご紹介しました。

さて、佐渡で野生復帰の取り組みをして
きました。この図は佐渡で2008年から放鳥
したトキが時々本州の方に飛んでいきます。
その飛んでいった場所を示した図になりま

す。ここ能登にも何度も佐渡で放鳥されたトキが飛んできたという地図になります。佐渡では500羽を超えるトキが野生復帰してきた、でも佐渡だけでトキが生息しているのでは安定したトキの生息にはならない、いくつかの場所で、かつて日本各地でトキが生息していたようにトキの生息地を一つ増やしていくことが大事だ。その第一弾として環境省が専門家と検討し、佐渡以外の最初の放鳥候補地にここ能登と出雲の2か所が選ばれたということが昨年8月です。

そしてこの能登では県と9の市町、そして地元の関係団体の皆さんが協議会を設置して野生復帰に向けた取り組みが動き出しています。石川県にはトキ共生推進室というトキの名前の付いた室も設置をされて取り組みが加速化しているという状況です。これはその能登での野生復帰を進める上での9の市町で1か所ずつトキが住める環境づくり、モデル的な環境づくりを進めていこうというモデル地区の位置を示した図になります。

七尾ではそれに加えて七尾独自のモデル的なサイトも設定をされているという状況があります。この9の市町の範囲というのが能登の世界農業遺産、能登の里山里海の地域と一致をしている。非常に農業遺産とトキの野生復帰の関わりは深いということになります。能登の里山里海、世界農業遺産ですけれども、どんな点が評価されていたかというのを振り返ってみますと、生物多様性が守られた伝統的な農林漁業が行われている、非常に多様な生物資源がある、とても優れた里山景観があって、伝統的な技術があり、農耕にまつわる文化、祭礼が継承されている、こういった点が評価をされたというものです。この中で生物多様性、自然環境の面でこの能登のGIAHSの枠組みのもとで能登GIAHS生物多様性ワーキンググループというのを一昨年2年前に国連大学も関わって立ち上げました。

能登のGIAHSの生物多様性、自然環境の価値をもっと磨いていこう、悪化を止めるだけじゃなくてより良いものにしていこう、そのための活動を議論するワーキンググループが立ち上がりました。ここでの議論を受けて、子ども達も含めていろんな人が参加できる生き物調査の活動を始めています。スマホのアプリも使って楽しく能登の生き物、里山里海の生き物を観察してデータにしていくという取り組みが動き出しています。能登の里山里海、佐渡と同じようにこの里山里海がいろんな意味でつながり合っている、その中に地域の人たちの農業や林業や漁業の営みがあり、地域の祭りや行事、そういった文化があり、そしてそこに生き物、自然環境、生物多様性がある。今回、トキの野生復帰をすることで、このつながりの中にまたひとつトキという生き物が加わることになる。かつての状況を取り戻すことになる、こういうことだと思います。

こういった生物と文化のつながり、生物文化の多様性、能登のGIAHSの大きな特徴だと思いますし、こういう自然と文化、自然と人の暮らしを紡いでいくことで地域の個性を磨いていくこと、これが地域を活性化していく上で非常に欠かせない大事なカギになるのではないかと考えています。これは能登ではお祭りが盛ん、さっきも太鼓の演奏がありました。一年に一度、行われる祭りのご馳走を一年がかりで準備をしてその様子を国連大学が地域の皆さんと一緒にコラボして絵本にしました。祭りのご馳走、ごっつおを作ろうという絵本です。この絵本を作るなかで地域の人たちからこの能登の資源を活用するいろんな知恵を聞かせていただいて、それをこの絵本の中に盛り込んでいきました。この絵本を使って子ども達にこの地域の価値を見つめ直してもらい、そしてそのことによって里山里海の価値を次の世代に伝えていく、そんなプロジェクトになります。こんなことも地域の価値を磨いて地域の活性化

に活かしていくうえではとても大事な作業なのではないかなというふうに考えています。

最後のスライドになります。石川県の中でいろんな国際認証地域が分布をしているという図になります。能登に世界農業遺産があり、南には白山ユネスコエコパークがあり、さまざまな国際認証地域がある、こういった国際認証地域を活用して、世界で議論されていることと地域の人たちの実践、地域に根差した活動をつないでいくということも非常に大事なことだと思っています。

さまざまな国際認証地域の間で経験を共有して学び合いをしていく、そのことで地域の価値にさらに磨きがかかる、あるいは地域活性化に向けたアイデアやヒントを得ることができる、そういった役割を国際認証地域は果たしていくことができるのではない

かというふうに思っています。GIAHSの取り組み、世界の中で進んできたGIAHSが2011年に初めて日本で能登と佐渡が登録されました。そこから10数年の歴史を積み重ねてきたわけですが、私たち国連大学もその最初の始まりのところからGIAHSを日本の中で活用していくということで関わらせていただきました。ぜひこれからもこの農業遺産を活かして豊かな地域づくりを進めていかれる全国の皆さんと国連大学と一緒に歩みを進めていきたいというふうに思っています。これからも能登は全国各地の皆さんと共に歩みを進めていくことができるといふふうに思っていることを皆さんにお伝えして、私の方からの発表を終わりたいと思います。皆さん、ご清聴、どうもありがとうございました。



農業遺産認定地域の 高校生による取組発表



農業遺産シンポジウムの関連行事として、農業遺産に認定された8地域から、能登の2校を含む11校26名の高校生が参加し、意見交換会(ユースセッション)を開催しました。

農業遺産の保全・活用をテーマに、各高校の取組発表や、グループに分かれて意見交換を実施し、各グループで取りまとめた意見をもとに、若者が取り組むべき事項などを取りまとめた「農業遺産ユースアピールin能登」としてシンポジウムの中で発表しました。

〈参加高校〉

- 宮城県 古川黎明高等学校
- 山形県 米沢商業高等学校
- 新潟県 佐渡総合高等学校
- 石川県 七尾東雲高等学校
- 日本航空高等学校石川
- 滋賀県 長浜農業高等学校
- 和歌山県 南部高等学校
- 神島高等学校
- 徳島県 脇町高等学校
- 宮崎県 高千穂高等学校
- 五ヶ瀬中等教育学校

次代に向けたメッセージを発信 農業遺産認定地域の高校生から



国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット研究員の小山明子氏が進行を務めました

農業遺産ユースアピール in 能登 2023

農業遺産ユースアピール in 能登 2023

日本国内8地域の世界農業遺産および日本農業遺産のユースが、「2023年農業遺産シンポジウム」の場に集い、私たちの農業遺産の未来を守り、豊かで持続可能な地域社会を構築するために、自分たちができることを考えました。

私たちは、農業遺産を守り、さらに良いものにするために、次のように行動します。

環境を守りながら地域資源を活用し、地域を活性化させていくために：

1. 高齢者だけが担っている産業の体験会を四季ごとに企画・運営し、全国から体験者を集め認知度獲得を目指します。
2. 農業遺産について自分たちの学校の校内で呼びかけるなど情報を発信します。授業で、地域の魅力を伝えて、小学生や小さな頃から将来の幅を広げます。

農村所得を向上させ、地域経済を活性化するために：

3. 生産者とのつながりをつくり、それを周りの人にすすめます。

地域の文化を守り、継承・発展させていくために：

4. SNS等での情報発信を積極的に行い、実際に文化を体験できる現場に行ってみます。

農業遺産を地域内外の人に伝え、より多くの人々に農業遺産を守っていくための活動に参加してもらうために：

5. 地域のイベントにボランティアとして参加し、観光客と交流することで、関係人口を増やします。動画や写真を撮影、編集しSNSで発信します。

そして、私たちの農業遺産を未来に引き継いでいくために、下記を呼びかけます。

農業遺産認定地の大人たちへ

- 1.1. 自分たちの地域を知り、誇りを持ち、地域内の繋がりを築いてください。
- 1.2. 学校教育で地域の魅力を伝えてください。
- 1.3. 対話ができ、つながりができる場所と機会を作ってください。そして、若者の考えを大人に伝える機会をたくさん用意してください。

14. 影響力がある大人や著名人から農業遺産を発信してください。そして、私たちの活動を新聞や駅などの人が集まる場所で発信してください。
15. 農業遺産の付加価値をつけて農林水産物や商品を売ってください。
16. 文化を継承するための予算を増やしてください。
17. 地域の企業と円滑に連携できる環境を整備してください。

国内外の農業遺産認定地のユースへ

18. 自分の地域の課題を「じぶんごと」として考えて、地域の資源に興味を持ち、積極的に農業遺産関連のイベントに参加し、発信していきましょう！
19. もっと自分たちの地域の可能性を信じて、みんなのためにそして自分のために、文化継承・発展のために今できることを精一杯やっていきましょう！
20. 自分たちが今行っている活動を続けて、大人たちの行動を引き継ぎましょう！
21. 農業は楽しい！まずは身近な人からでもコミュニケーションを取り、いろんな人と関わりをもち、新しい世代に伝えていきましょう！

2023年11月10日
石川県七尾市にて

もつ魅力と価値 農業遺産認定地域が

PROFILE

▶コーディネーター



小谷 あゆみ氏

フリーアナウンサー／農ジャーナリスト。農林水産省・世界農業遺産等専門家会議委員。石川テレビ在職中、ニュース番組で能登の棚田オーナー（旧中島町・藤瀬の棚田）になり、米づくりや里山の農文化を体験取材したのを機に農業・農村取材をメインテーマにする。農の価値が見直される時代、都市（消費）と農村（生産）の新しい関係を考え、全国の農村地域を取材、発信。また、野菜を作るアナウンサー「ベジアナ」として、東京からも農ある暮らしを提唱。日本農業新聞ほかコラム連載中。国や行政、農業関連のシンポジウムやイベントで講演、司会、コーディネーターなど多数。

▶パネリスト



山本 亮氏

株式会社百笑（ひやくしょう）の暮らし代表取締役。みい里山百笑の会事務局。東京農業大学在学時に農村景観を保全するためのゼミ活動で輪島市三井町を訪れた際に、里山の暮らしが持つ本質的な豊かさや持続可能性に惚れ込み、2014年に輪島市地域おこし協力隊として移住。任期終了後、「里山の暮らしを楽しむ仲間を増やすことで、自然と人に優しい社会をつくる」ことをミッションに2018年に株式会社百笑の暮らしを設立。里山の暮らしの魅力を多くの人に伝えるため、世界農業遺産に認定された能登の里山を1つのホテルに見立てる「里山まるごとホテル」のプロデュースに取り組む。



今野 正明氏

山形県紅花生産組合連合会副会長。1994年に「白鷹紅の花を咲かせる会」を有志8人で設立し、事務局長に就任。2004年に「白鷹紅の花を咲かせる会」の紅花生産量が県内（日本）1位となり、今日まで維持。1999年に山形県紅花生産組合連合会理事に就任。体験・交流館「紅花の館（はなのやかた）」をオープン、紅花畑一坪オーナー制度を開始。2004年に山形県紅花生産組合連合会副会長に就任。これまで、最上紅花の「日本遺産」、「日本農業遺産」認定に資料の提供等で協力。1995年から総合学習、2008年から教育旅行を受け入れ、紅花振興に尽力している。2022年 山形県紅花マイスター就任。



島田 由香氏

株式会社YeeY 共同創業者／代表取締役。一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会代表理事。慶應義塾大学卒業後、パソナを経て、米国コロンビア大学大学院にて組織心理学修士号を取得。日本GEIにて人事マネジャーを経験し、2008年ユニリーバ・ジャパン入社。2017年に株式会社YeeYを共同創業し代表取締役に就任。企業の経営支援や人事コンサルティング、組織文化の構築支援などを通じて、日本企業のウェルビーイング経営実現に取り組んでいる。自身も1年の半分近くをワーケーション先で過ごすなど地域活性に情熱を燃やし、地方自治体の組織コンサルティングやワーケーションなどのコンテンツ開発支援、地域住民のウェルビーイングを高める仕組みづくりを行う。



ここからはパネルディスカッションに移らせていただきます。農業遺産認定地域が持つ魅力と価値と題しまして3人の皆さまと共にお話を進めて参りたいと思います。コーディネーターは引き続き私、小谷あゆみが務めさせていただきます。それではご登壇いただきましたパネリストの皆さまをご紹介します。株式会社百笑の暮らし代表取締役山本亮様、山形県紅花生産組合連合会副会長今野正明様、そして一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会代表理事島田由香様。まずはパネリストの皆さまからそれぞれの活動をされています立場や経験をもとに、地域の資源をどう生かして、そして取り組みをされてきましたか自己紹介を兼ねておひとり5分程度でお話をいただきたいと思います。今、高校生の素晴らしい真っ直ぐなコースの発表を受けまして、まずはトップバッター、能登地域を代表しまして山本さんからお願いたします。

【山本】 今、ご紹介いただきました株式会社百笑の暮らし代表取締役の山本と申します。高校生の話の後ということで気が引き締まる思いですけれども、僕はまだ30代なのでまあ若者、移住そして起業した能登でやっている人間として活動内容などをご紹介させていただければと思います。よろしく願いたします。

出身は東京の世田谷でございます。こちらに書いてある東京農業大学、こちらのゼミ活動で当時20歳の時に能登と出会ったのをきっかけに、この里山の暮らしに惚れ込み、27の時に移住いたしました。今、移住9年目というかたちになります。家族としては同じく東京出身の妻と5歳の息子と生活しております。キャリアとしては東京時代に街づくりのコンサルタントを務めた後、移住のタイミングで輪島市の地域おこし協力隊をやっておりました。こちらが今、私が住んでいる輪島市三井町の風景ですね。かやぶき民家があって、裏に里山、目の前に田んぼと、本当、典型的な日本の里山風景が残っているエリアで活動をさせていただいております。こうした山菜、特にこの地域だと260種類ほど山菜やキノコ、そして野草、木の実、そういった食用できるものがある本当に恵まれた里山資源がある地域でございます。それ以外では世界農業遺産でもよく取り上げられる「あえのこと」、田んぼの神様に感謝する文化ですね、そういったものが地域の人たちが保存会を立ち上げて残して、今なお、やっているところがございます。本当に僕はこれを20歳の時に初めて見まして、今まではお米というのは買って食べるもの、特に学生時代でしたので母親が自動炊飯器で炊いたら出てくるも

のだったんですけれど、本当に地域の人たちがこのように田んぼの神様に感謝しながら作られているお米という本当に尊いものに見えるようになりました。

そういった中、地域の方とワークショップや調査をしていく中で、あるおじいちゃんがこういうことを言ってきました。都会の人ってお金がないと何もできないよね、だけどもうちは里山があるから食べるものには困らない。だから例え、貧乏でも人に優しくできるんだ。本当になんかざらっとこの言葉を田んぼの横を歩いている時にじいちゃんが言ってくれて、本当に頭をこう殴られる衝撃ってこのことかと思うぐらいに衝撃を受けて、なんてカッコイイじいちゃんなんだろうと、自分はアルバイトしては好きな服を買ったり、旅行したりっていうお金中心の社会しか知らなかったけど、このおじいちゃん自分で何事も生み出せるし、しかもそれを自分のためだけじゃなくて、地域のためであったり誰かのためにそういうことをやっているという、本当に豊かだなんて感じました。

このおじいちゃんみたいな年の取り方をしたいなと思ひまして自分のミッションがだんだんと決まってきました。それが里山の暮らしの豊かさを自分たちが引き継ぎ、楽しみながら、その暮らしの入り口を作ること、自分自身がその暮らしをまず引き継ぎたい、楽しみたい、そしてその楽しみを誰かのために多くの人に享受できる場所を作っていきたい、そう思うようになりました。そこでできたのが里山まるごとホテルという取り組みです。普通、ホテルといいますとこちらの写真のように大きい建物があると思うんですけれども、その中に機能が入っています。一方で地域をまるごとホテルにするというアルベルゴ・ディフーズというイタリアの取り組みがございます。地域の中にあるものをホテルの機能に見立てていくというかたちです。こちらは石川県のスローツーリズムという取り組みを通して私は知ることができ、実際に現場で学ばせていただく機会も得ることができました。この考えを能登の里山に当てはめまして地域をひとつのホテルに見立て、里山の暮ら

しをまるごと楽しめる場所を今やっております。こちらの築170年のかやぶきの古民家がホテルのレセプション兼レストラン、要はホテルの1階部分ですね、お土産コーナーがあったり、サロンもあつたりします。オイルマッサージです。そしてその中では里山の風景を見ながらゆったりしたランチカフェを楽しめます。そして今、60～70代のキッチンスタッフと20代の飲食マネージャーがいるんですけれども、発酵食×ばあばの知恵袋をテーマにランチメニューを提供しております。スイーツを出したり、そしてホテルの部屋は地域の周りの空き家を活かして古民家をリノベーションして一棟貸し型で宿泊施設を今一棟まず作っております。古民家のよさを残しながら、現代の快適基準も取り入れたお部屋を作らせていただいています。こうしたカタチで自分が暮らしの中で経験した魅力や地域の方から教えてもらった魅力を紐解いてお客様が自然とその暮らしに触れられるようにサービスをデザインしていくということでお散歩ツアーが毎日あり、地域の暮らしを紹介しながら実際に野菜を収穫したり、地域の方と触れ合ったりすることを通して地域の魅力を紹介する宿泊施設を作っております。夕食では地域のおばあちゃんが心をこめて作ったお料理を出しつつ、お散歩ツアー中に収穫したものを、例えば天ぷらですとかそういったもので出すような料理を通して、暮らしではないんですけど、そこに暮らしているかのように実際に地域を歩き、地域の方と触れ合い、土に野菜に触れ、楽しめると、そういったようなホテル運営をやっております。以上でございます。

ありがとうございます。里山まるごと資源として活かす、その取り組みをされて9年になるという山本さんです。まさに高校生の若者の意見がありましたけれど、今度はよそ者の意見として今、もう既に9年になっているという山本さん。その取り組みの中で課題を感じることもあるかと思ひます。また、後半で伺ってまいります。



続きまして、日本ウェルビーイング推進協議会の島田由香さん、お願いいたします。

【島田】 こんにちは。よろしくお願ひいたします。私は一次産業ワーケーションという言葉を作りまして、この農業遺産の地から日本をよりよく変えるということに燃えております。その事業をですね、片一方はアクティビティ、片一方は事業。一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会の代表をさせていただいております。少しだけ自己紹介をしようと今決めました。というのは、私が何者なのかというのを先に少し分かっておいていただけるといいのかなと。組織と人事のことをずっとやってきておまして、大学の中からこの分野、どうしたら幸せに働くということが実現できるんだろうと。小さな時からいろんなエピソードを母、父に聞くと、先天的に人に超興味があって、とにかく人間が面白くてしょうがない。なので今日ここにも300人くらいいらっしゃるのかな、ひとり一人、どんな方なのか、話しにいきたくなっちゃうぐらい。人間って誰かのひと言ですごく元気で「やったー」と思ひきや、誰かのひと言でガクンと落ち込んでいく。同じ人間であっても、例えば、状況によって、相手によってかける言葉が違う、こういうのって何なんだろうってのがすごく興味があっ

て、結果としてそれがモチベーションというものなんだとか、こういったことをずっとやっていけるお仕事って何なんだろうってなった時に人事というのがあるんだということで、私は大学の時からずっとこのことをやっております。昨年の6月末までは基本的に大きめの企業に雇われておまして、日系の企業、米系の企業、ヨーロッパ系の企業、最後は皆さんも使ったことがあるかと思ひますラックスとかダブ、ドメスト、ジフとかですね、このような消費材の会社、ユニリーバというヨーロッパ系の会社の日本支社の人事部長、総務部長、そして役員が最後で14年間やっていたんですけれど、あることだけに時間とエネルギーを使おうと思って昨年の7月からは雇われない働き方ということで自分でやっております。ここにいろいろ書いてあるんですけれども、すごく大切にしていることを6個書いてきました。その中でも自分らしくあるということを非常に大切に生きております。ですので、今日、皆さんにやってくださっていると思うんですけれど、自分らしく聞かせていただきたいですし、知っておいていただきたいことは自分らしさというものが発揮できている時にパフォーマンスが一番上がりますので、例えばどういう状態で人間があると生産性が上がるのかとか、チームとグループはどう違うのかとか、人材

開発とか組織開発といったところが私の専門分野になります。

じゃあ、なんでその私が今この農業遺産のことをやっているのかということになるんですけども、ちなみに今日、行政の方とか自治体の方が多いと思ったので政府系とか行政、自治体でもいろんなことを一緒にやらせていただいております。例えば和歌山県、私、すごく好きで、今はワーケーションリーダーという県の知事から拜命いただきまして、今日もユースで来てくださっていた南部高校の学校運営委員をやらせていただいたりしております。この4つのことだけに時間とエネルギーを使って生きると決めたので、雇われない働き方を選んでおります。この4つのことをやれる場所に農業遺産ががっつりハマったなど言うんでしょうか、結果としてです。

ということとどんなことをしているのか少し事例をお話すると、いろんなことをやっている中でも今日関係するのは和歌山県のみなべ町で昨年の6月にスタートしました、これはアクティビティです、お金が発生しません。ある意味、言葉を選ばず言えばボランティアです。梅収穫ワーケーションということをやっております。石川県能登町、今日も石川県ここにまた来られて嬉しいですけど、木こりの皆さんのですね、働きぶり、仕事に対する姿勢、それから森を作る、山を守る、こういったことをもっともっと世の中に知らせていく必要があると感じたので、木こりプロモーション事業ということでNOTONOという会社を昨年作りました。どんなことをやっているのかというと、梅収穫ワーケーション、こんな感じです。何をしているのか、和歌山県、梅の産地です。もちろん世界農業遺産なんですけれども梅システムというのが認定されています。6月、梅農家さん、まじ、大変なんです。人手不足、収穫の時って待ってられないんですよ、梅は待ってられないという言葉がここで知ったんですけど、とにかくだったら困ってらっしゃるんだったら東京や大阪からみんなワーケーションしようよって呼んできて、1日4時間からいいから梅作業、一緒にやりませんかという活動を昨年からスタートしています。その

一部の写真がこんな感じですね。初めて知ることがいっぱいあったんですけども、本当にこれは参加者のウェルビーイングが上がり、そして受け入れてくださる地域、農家さんのウェルビーイングも上がるということで、もちろん今年もやりましたし、来年も再来年もそしてその次もやっていこうと思っている事業になります。去年は30日間、今年70日間に増やしまして、去年は11軒の農家さん、今年19軒の農家さんとやらせていただきました。参加人数、見ていただければ分かるんですけど、今年について言えば238人、リピートして来て下さる方もいるので延べで言うと382人来ていただいて、今年70日に広げました。ネットと言われるんですけど、青いネットを梅の木の下にまず敷いてから全てがスタートするんですね、その敷くところからお手伝いさせていただいたという背景があります。能登では私たちはNOTONOという会社を作っています。これ、私の好きな言葉なんですけど、NOTO is not Ordinary、能登って普通じゃない、能登って特別、ここから取ってNOTONOで、能登の何かっていうのを伝えていきたいなと思ってNOTONOって会社にしたんですけど、こういった木こりの仲間たちの活動のシーンをこういったインスタだったり、動画だったり伝えながら、それから木こりワーケーションっていう、キコワーって呼んでいるんですけど、手伝いに来ようよっていうことをやったりしております。

私はなんで梅もしくは木こりってなっているのかって言ったら、やっぱり森とか山が良くないと結果として海に来るっていう、あの海的环境もとても大事、でもたぶん何かできるとしたら森や山から始めていくということを何となく感じて、今はこの和歌山県とそれから石川県のほうでこういった活動をしております。はい、こんな感じです。以上です。



続きまして、山形紅花を取り組まれています今野さん、お願いします。

【今野】 山形から参りました今野です。紅花を栽培して33年目になります。この画面を見て、皆さん、山形ではどこでもこのように紅花がいっぱい咲いているというふうに思われるかもしれませんが、そうではありません。限定されたところになっております。それだけ紅花は山形県の冠が付くような花なんですけれども、あまり知られていないということもございました。ここにきて農業遺産、そういった申請をするようになって各地区、各自治体で協力するところが十分に出てきて、ある程度の面積が確保されるようになりました。

33年経つわけなんですけれども、私が紅花を始めた頃は私たちの地域には紅花は咲いていませんでした。私は東京からUターンしたものですから、帰ったら山形では紅花国体だとか紅花の山形路キャンペーンとかたいへんな費用をかけて実施してはいたけれど、その花を見たこともなかったし、聞いたこともないような状況だったんで、まずは自分で咲かせてみようというところから始まったような実態です。それがきっかけだったということです。

さまざまな活動をしてまいりましたが、先にここだけ申し上げますけれども、ここで紅花摘みをしているのは地元の方ではなくて、花摘み猫の手隊といって手で紅花を摘むのはとてもたいへんな作業ですので、地域の人たちだけでは足りません。それでどこから来ても1kgを摘むと1000円差し上げますという仕組みを作りまして、誰でも摘んでいただければお金になる、お小遣いになるという仕組みをして、ここで今摘んでもらっているような恰好です。これが私が紅花を栽培した当初の画面です。37歳でUターンしまして平成6年、3年後にみんなで紅花を咲かせましょうということで、町で「白鷹紅の花を咲かせる会」を発足しました。この8人の方々なんですけれども、33年も経ちましたのでもう天国に行った方も4名ほどおります。ちょっと長い年月だったかなと今思っております。「しらたか紅花まつり」の冊子なんですけれども、第一回しらたか紅花まつりをやりました。やりましたと言っても自分の家の畑の庭先でやりましたところ、ラジオかなんかで宣伝して下さって、70～80名、紅花の畑に来ました。この時は神戸から折りしも「おもひでぼろぼろ」などが劇場で発表されていた時だったもんですから、そちらの方からも駆けつけてくれた方がおまして、この手作りのパンフレットも神戸の方が作っ

てくれた冊子でした。2年目からは徐々に町や自治体の補助も得てやるようになりましたけれど、現在では第28回のしらかば紅花まつりは町で開催するようになっていきます。私は紅花を何とか世間と言いましょか、知ってもらいたい、ついでには日本の宝物にしたい、そんな気持ちに栽培しているうちに駆られてきました。学校の総合学習とかそういったところにも、先生方に駆け寄ってこういった紅餅づくりなどの体験、紅花染めをしたり、触れてもらう、体験してもらうところから始めました。実はこの紅餅、私、紅花を生産して33年と言いましたが、花を生産しているのではなく、ここにありますあの花を摘んでですね、3日3晩寝かせる、発酵させて、そして臼でついてこのようにムシロの上に並べて赤の色素や口紅の原料になる紅餅というものを出荷しているということです。このたった1枚なんですけども3.75gありまして、花一匁(いちもんめ)というのはここからきています。この花一匁を作るのに先ほどの紅花をどれだけ摘めばいいかというとおよそ300輪です。それでこれ3.75gたった1枚ができあがります。江戸時代には実に金の10倍、米の100倍という値段で取引されていたということです。ちなみに現在でも金には敵いませんが米の100倍はいたします。ですから皆さんもぜひ作ってください。こうやって学校行事、子供行事なんかで紅花染め体験などをすると、紅花は畑で咲いているだけでは子どもたちは興味をあまり持ちません。ですけれども自分の作品が出来上がる、白い布が赤く染まるという感動は強いようで、それから紅花への関心といいましょか、興味を持ってくれる人が多くなりました。先ほどの紅餅づくりの中学生は紅花って畑で咲いているものだけだと思っていたけど紅餅になって口紅や真っ赤な衣装になるんだということを聞いて、これは宝物だというふうに中学生が言ってくれる、そんな話を聞くと私たちは嬉しくなります。口紅と言いましたが、これが本紅、日本の老舗のお店でたった1軒だけ作っていますけれども、緑色に見えます。輝いています。究極の赤と言ってですね、最上紅花で赤の色素・カルサミンを取り出し

て乾燥させるとこのような玉虫色になります。よく浮世絵なんかでこのように下唇がグリーンだったり、ちょっと黒っぽく写っている絵がありますけれども、それはこのような高級な口紅をさしていますよという証明です。水をつけると赤くなります。もう一つはこのように、これは紅花染めなんですけれど、8回の重ね染めです、昔から八潮染めというふうなことで万葉集などにも出てきますけれども、そういった日本の文学であったり歴史の中で紅花が題材となって残っているものもたくさんあります。色素だけではなくて、薬理効果があったり、文学に残っていたりということで紅花は奥が深いな、まだまだ私たちも情報発信しなきゃならないな、そして日本の宝物を世界の宝物にしていかなきゃならないなというふうに思っているところです。以上です。

ありがとうございます。今野さん自身、紅花に魅せられて33年取り組まれている生産者でもあり、後進に教えるマイスターでもある今野さんです。ありがとうございました。

【小谷】 雇われない働き方という大きなテーマをいただきました。働き方と地域活性と人材育成とウェルビーイングを達成してウェルビーイングという、働き方というテーマはもしかしたらお三方それぞれ共通しているお話かなというふうにも思いました。どうしても農業は短期に仕事集中しますので、人材を標準化することが難しいことがある中で、外の人をうまくワーケーションとかいろんな形でマッチングするというのも援農ですとか、いろんな形があると思います。

それでは皆さんがどういう方か伺いましたので、ちょっと申し遅れましたが私もスライドを持ってきましたので簡単に自己紹介をしてから本題に移りたいと思います。元々石川テレビという地



元でアナウンサーを10年やっておりまして、その中で里山の取材体験をして能登の棚田オーナーになって、1年間、代掻き、田植え、稲刈り、はさかけというふうに行って行く中で、千枚田じゃなかったんですけど、こちらは旧中島町、七尾市のところでしたけど、藤瀬の棚田というところでしたが、取材していく中で農体験が本当に楽しい、ぬかるみに裸足で入るのが気持ちいい、五感が、もちろん棚田景観の美しさ、そして農家のじいちゃん、ばあちゃんとの会話が面白い、方言も楽しい、そういう思いで、生き物も多様でいろんな虫を見たりということで、山本さん、さつき世田谷っておっしゃいましたけど、私は今も世田谷に住んでいて、もともとは実家は兵庫なんで、よそ者の目線で棚田や里山地域を見た時に、農の価値とは、食料生産のために農家さんは米を作って棚田を作るんだけど、外の人間にとっては景観やいろんな触れ合いも含めて生産だけじゃないかと、米の価格だけじゃない、いわゆるお金の落とし方があるんじゃないかと、プロセス、関わりに喜び、感動、物語、まさに商品化のヒントがあって、それが知的発見で、テレビ的に言うとネタ、話題、情報の宝庫であり、それが素材であり、まさによその地域から石川県に来た人間とし

てよそ者の視点、メディアの視点ということですが、今はそういうことから農ジャーナリストと名乗って都市と農村、あるいは消費と生産、もっと楽しい部分を農業農村問題、課題は多いんですけど見方を変えると切り口を変えると実はまさにまるごとホテルになる資源の宝庫なんだという、そういう発信をしております。今は日本農業新聞で日本にあるGIAHS地域15カ所を毎月紹介する記事を書いたり、同時にYouTubeやSNSで発信しています。

ということで、今日のテーマ、改めて地域資源、里山資源、皆さん必ず会議で使っている言葉ですけど、改めて地域資源、里山資源とは何か、見る人によって違うということですよ。たぶん、今日のパネリストのお三方、よそ者の視点をお持ちで、どうしても地元の人っていうのは当たり前でそれを売り物にするってなかなかそういう視点、センスが得にくいわけですけど、今日の高校生の話にもありましたけど、改めて地域資源、里山資源、何が資源なのか、宝なのか、何を売って稼いでいくのか、そのためのターゲット、誰にどうやって戦略を定めていくのかということに改めて3人の皆さんと話していきたいと思いま

【小谷】 それでは本題テーマに移るといことで、まずは山本さんですね。ちょっと、ひと言だけ、山本さん。里山まるごとホテルはどんなお客さんが多いんですか？

【山本】 30代から40代、多いのは日本の都市在住のご夫婦またはご家族連れが6割ぐらいですね2023年に入ってコロナも明けたので今年度に入ってからインバウンドの方々も徐々に増えだしているという状況です。

【小谷】 ありがとうございます。それを踏まえまして改めて山本さんに取り組み9年で気づいてきた課題、あるいは見えてきた価値、魅力、どういったものを今、お感じになってやられているか、改めてお願いしたいと思います。

【山本】 移住して9年、起業して丸5年が経ったところではあるんですけど、本当に今お三方がお話したことが本当にその通りだなんて思いながらお聞きしていたんですけど、やっぱり僕自身は農業遺産の価値、里山の価値ってやはり暮らし自体にあるというふうに思っています。もちろん、各地域、地域にそれぞれの暮らしがあると思うんですけど、先ほどお話の中でお散歩ツアーをやっているという話をしたと思いますが、お散歩ツアーをする時にこの写真の、皆さんで言ったら右側に写っているお家なんですけど、うちのレストランから歩いて5分くらいのところにある仲良くさせていただいているおじいちゃん、おばあちゃんの家です。ここのお家の畑だったり、周辺を使わせていただきながら収穫体験などをやっているんですけど、本当にこの周りがめちゃくちゃ豊かで、栗の木がたくさん植えられていたり、柿の木があったり、いちじくの木があったり、そして季節ごとに咲く花の木や草が植えられている。里山って単なる自然ではなくて人が暮らしやすいように作り替えられた自然だと思いませんか。すいません、たぶん皆さんの中で当たり前のことを改めて言うような形になってしまうんですけど、その暮らしがあってこそ、

里山というものが成り立つ、人が暮らしやすいように自然を生かしてきた、そういったものだということが本当に感じられる場所が、このお家の里山周辺だということなので、他のパターンのコースもあるんですけど、このコースをよくお客様を連れて行かせていただいています。

やっぱり、本当にこの暮らし、特に70代以上の方が持っている知恵ですね、それが本当に素晴らしいと思っています。例えばですけど、野草、先ほど260種類ぐらい使えるものがあるというお話をしましたけれども、70代以上の方ですと例えば野草茶を自分の体調に合わせてどの野草を使って飲むといいかという知恵を持っている方がまだいらっしゃいます。昔は、西洋医学が発達する前はそういう東洋系の考え方、漢方的な考え方で当たり前にあったものかも知れないんですけど、今ではだいぶ少なくなってきたところだと思います。例えば胃の調子が悪かったら、キハダというものを煎じて飲んだりですとか、ドクダミはデトックス効果があるからお通じが悪い時に飲むとか、そういった知恵を持っている人たちがいます。でもそれって効果だけの知恵ではなくて、里山のどこにどんなものがあるのか、そしていつ採ればいいのか、どうやって保管すればいいのか、どうやって飲むようにすればいいのか、たくさん知恵がその中に集まっていると思います。買っちゃえば、もうそれでワンパックで済みますけど、本当に自然と関わるっていうのはそういうことだと思っていて、自然に関わらないとその解像度、知識は上がってこないと思います。僕も今年から実はキノコを採りに、山に入るようになりまして、誰も教えてくれなくて、キノコ採りっていうのは。何でも教えてくれるじいちゃん、ばあちゃんもキノコだけは教えてくれないので、もう自分で入るしかないと思って入ったら、あ、この林ならあのキノコがあるんじゃないかと、東向きの斜面で広葉樹林ってここかって、自然を見るカタチがやっぱり変わってくるんですね。そうすると里山のことがよりリアルになってきて、あ、この里山をもっと守るには、日の光が入るようにするにはどうしたらと、そういったふうにどん

どん考えが、やっぱり関わらないとわかって来ないってということが改めて最近感じていることではあるんですけど、そうした暮らしの中で自然と関わってその恵みを活かす、そしてその恵みを活かしていくことが風景となり文化となる、それこそが暮らしこそが僕が魅力に思っていることだと思っていて、里山まるごとホテルではそれを活用させていただいております。

ただ、課題という意味では先ほど70代以上の方で野草の知識があるという話をしましたけれども、この世代間の知識、文化の差、これが私、移住して今年9年が経ちましたが、最初のころは今の70代は60代の時ですね、まだ元気で地域と一緒に盛り上げていこう、頑張ろうというような形でいろんな活動がスタートしました。その人たちから聞く話が本当に面白くて、学びになるし、自分もどんどん暮らしに取り入れていこうってことをやって気づいたら9年が経っていました。9年が経ってみると当時「やるぞ」ってやっていた人がだんだん高齢化してきて体力がなくなってきました。じゃあ次の60代の人たちとこうした話ができるかって言ったらなかなかできないっていう現実をここ数年で感じています。先ほどキッチンに70代と60代の人がいるという話をしましたけれども、60代の人になると料理の仕方が変わってくる事実も分かってきました。マヨネーズを使いだす、分かりやすい例で言うと。70代達はマヨネーズ、あまり使わない。やっぱり食文化に対するアプローチ、そして普段の農作業とか、暮らしの中のものっていうのが確実に70代以上と60代以下で違うというふうに感じています、60代になるとほとんどサラリーマンとか働いている、要は農家としても兼業が多くなるということが感覚値としてあります。だからこの世界農業遺産に能登が認定されておりますけれども、その文化だったり、日々のことっていうのは多くは70代の人やっているんじゃないかという仮説を感じております。そして60代の人たちとなるとなかなかそこ親和性の高い暮らしとか知恵があるわけではないんじゃないかと、もちろん、人によたらある人も絶対にいると思いますけど、相対的に見た

ら少ないんじゃないというふうに感じていまして、この70代以上の人たちが築き上げてきた里山の関わりであったり、知恵、そういったものをどうやって引き継いでいくのかが大きな課題だと感じています、逆に僕みたいな30代の若者で移住したり、Uターンしてきた人たちのほうがそういうものに関心が高い、けど働き盛りであり、子育て世代であり、そしていろんな会合などにも呼ばれやすい世代であって、でも自分でも田畑も楽しみたいし、もっともっと習いたいし、時間が足りない。これ、どうやって解決していくのかが次の大きな課題になっていくんじゃないかなというふうに感じております。

【小谷】 ありがとうございます。短く1つだけ、今、起業してから5年で、移住してから9年という中で地域に広まりつつあると思うんですけど、基本的にはどうでしょうか、山本さんのやっていることを喜んで歓迎されている空気を感じる、「あなたの仕事、来てくれてよかった」という感じですか、地元は。

【山本】 本当にありがたいことに私のいる輪島市三井町って、先ほどの高校生の話の中でも拒絶する地域があるっていう話もありましたけど、全くそういうことなく、実は輪島市の中でも移住者の多いエリアでして、ありがたいことに移住者が新しいチャレンジをしてそれを受け入れてくださるような土壌があると思っております。でもじゃ1000人三井町いるんですけど、じゃあ1000人が全員応援したり、関わってくれるような形かっていうとやっぱりそうじゃなく、ざっくり体感100人くらいは応援してくれたり、野菜を持ってきてくれたり、何かあった時に関わらせてもらっている人がいて一緒にいろんなことをさせていただいているような感じかなと思っています。

【小谷】 ありがとうございます。今野さんにも課題を含めて、取り組まれてからの感じていること、あるいは発見したことを教えてください。

【今野】 燠炭焼きの画面が出てきましたけれども、実は8名で始めた紅花栽培だったんですけれども、今は33名くらいでやっております。そのきっかけと言いますか、紅花祭りも我々の手づくりでやっていたのが行政のほうでも町でやらせてくれということでやるようになりました。売るのは紅花が何に使われているのか、行政の方でも分からなかったそうです。国の伝統行事であったり、重要な寺社仏閣で使う、そのようなことが分かって来て、それって日本の紅(あか)を作っているんじゃないのというふうなことを行政のほうでも認識してくれて、キャッチフレーズも私が着ているジャンパーも「日本の紅(あか)をつくる町」です。行政で作ってくれました、紅花生産者にですね。そんなことでイベントも盛り上げているんですけど、栽培していて分かってきたことは祭りだけじゃなくて昔からの伝統行事、旧正月には「だんごさげ」というものもやるんですけども、白い餅と山形では赤い餅も一緒にだんごの木に下げます。白いのは米や眉がたくさん取れるように、赤は紅花がたくさん取れるようにそのような慣習も暮らしの文化の中で受け継がれている。皇室行事などにも使われている。そういうふうな無くてはならない日本の伝統文化にも山形の暮らしの文化にもなくてはならないものももちろんありますけれど、それ以上にハッと気づかされているのは、画面に出ているように紅花は連作障害があって5年ぐらいで全滅するような状況になります。でも山形ではこれまで450年の間、紅花栽培をしてきています。なぜできたのか、昔は農薬とかそんなもの無かったはずですが。結局のところ、こうやって燠炭焼きをしてちょうど、今、この季節なのでこれを紅花畑の中にすきこみます。あるいは菜種を撒いたり、紅花はキク科ですので違った種類のものを連作障害を防ぐために二毛作をしたり、秋には蕎麦を撒いたり。蕎麦も収穫することができます。そのようにして連作障害を防ぐということです。結局のところ、こういった堆肥も入れるんですけど、白鷹町では畜産農家もありますのでその堆肥の処理にも大変困っている状況がありました。産業廃棄物になってしまうの

で金がかかる、しかしながら紅花との農畜連携と言いましょか、そういったことでお互いに使っていくとWIN-WINの立場でやろうということで活用させていただいております。このような繰り返し繰り返しなんですけどもこれを続けることによって、連作障害は、33年と先ほど言いましたけれども、同じ畑で33年ずっと紅花をつくっております。それができるのは結局のところ、こういった土づくりが基本であるなど悟らされていると言いましょか、そういうふうに感じております。何よりも最先端技術と言いましょか、これを江戸時代の人が既に確立していたのかなと学ばされるなどという感じがしております。そんなことで農業遺産に申請になって紅花畑にはこういった有機栽培と言いましょか、大事であるなどということと、ニホンミツバチが実は私の紅花畑にあります。そのような生物も古来種はこういった古来の作物にはちゃんと生活しているのかなと、そういったことも大事にしていかなければならないのかなというふうに感じております。以上です。

【小谷】 ありがとうございます。土づくりが大事だという、8名だった紅花生産者が33名に増えたって驚異的なことだと思うんですけど、やっぱりどう想像しても、その生産だけで食べていくイメージじゃね、規模の小さいって言いますし、増えた人たちはやってなかったのに乗り出した人たちは何を喜びとして始めたんでしょうか。

【今野】 先ほど金の10倍には及ばないけども、米の100倍は、というふうに申しあげましたんですけど、耕作面積は小さいんですけどお小遣いにはなります。それと同時にさっき言ったように、日本の紅(あか)を作っているんだという意識、気概、やりがいみたいなものを感じてくれる人がほとんどです。日本の紅(あか)を作る紅花栽培に私が関わっているんだという意識の人が協力してくれています。

【小谷】 ありがとうございます。日本の紅(あか)、そのために行政やなんかも、紅花祭りと

発信も皆さんにそれが伝わっているということですね。

それでは島田さんですね。先ほどの資料でワークショップ、梅収穫で何百人の人が訪れて、すごく感じるのは地域はどうしても農作業が単純で過酷でしんどい労働になると、でも都市の人が行くともむしろ発見があったり、つながりあうことで刺激し合ってお互いのWIN-WINをまさに人事の専門家として感じておられる、改めて教えてください。

【島田】 まさにその通りでして、ちょっと言葉を選ばずに言えば、私たちど素人でかつ基本的に都心でオフィスと言われる場所でパソコンと携帯とで仕事をしている私たちにとってはこの梅の作業であったり、草刈りであったりというのはイベントなんです、よい意味でお伝えします。でも地域の皆さんにとっては、農家さんにとっては毎日の営みであって、毎日毎日、毎年毎年だとやっぱり嫌にもなるでしょうし、本当にすごい労働の量だと思うんですね。でもここはある意味、いってくださったように WIN-WINで、イベントなのでその時、に夢中になって初めてのことから本当に楽しいですよ。楽しんで帰るから、また来ようって思ってもらえるのでリピートが増えるんですね、で、結果、何が起きているかという、さっきチラッと申し上げましたウェルビーイングというものが上がります。ウェルビーイングという言葉は皆さんもう何回も聞いていらっしゃる方も多いと思うんですけど、政府が骨太の方針に昨年6月に入れていたこと、それから今年にも入りました。もうですね、日本政府としてこれは大事なことだと言って動いていますから、きっと各省庁の皆さんもそうですし、自治体にはガツと降りて来て、富山県さんはすごくやっていらっしゃるよ。必ず、知っておいていただきたい言葉であって、ひと言で言ったらウェル=良いビーイング=状態ということです。言い換えると幸福とか継続的幸福、要はここにいらっしゃる皆さん、私たちも含めて、いい状態でいられる、ということです。自分で選んで、その行動を選んで選択

していくということ、これがウェルビーイングにもすごく重要なことでして、私はその分野の研究まではいかないけれど学術的に学び、それを組織の中で展開してきた。これをすごく活かしながら今のこの活動を見ていくと参加者の皆さんのウェルビーイングがものすごく上がるんです。そのウェルビーイングが上がる時に5つの切り口があるんですけど、その5つの切り口全てに説明ができるくらい、例えば5つの切り口の1個はポジティブな感情が高い、上がっている人のほうがウェルビーイングが高いということがわかっていて、五感を思いっきり使って梅畑のなかで太陽が燦燦と照って、緑、梅の実が超かわいくて視覚的に、しかもとってもいい香りがする、でも汗だくになりながらもぐ、あるいは拾うって言うんですけども、もう没入するんですね。都心で働いていて仕事に集中って瞬間はあるかもしれないけど、没入ってないはずですよ。だいたい過去にやったことを後悔して、あれしなきゃよかった、こんなこと言っちゃった、あんなこと言われたって落ち込んで、またこの先の会議の資料つくってない、今日お迎えどうしよう、ご飯つくってないやとか、要は未来のこと案じててここにいないんですよ。今、体がここにあって心も意識もここにあると、この瞬間を持てるかどうかというのが実はウェルビーイングにすごく大事で、これが2点目のポイントになるんですけど、こういったものはこの活動の中では上がるのがわかっている。さっきの地域資源とか里山資源にはどんな価値があったりするのかという意味では、ちょっと簡単なんですけども、5つ書いたのは自分の今までの経験から、あえて言うんだったらこういうことかなと、やっぱり大自然があるというのはターゲット、都会の人、都心の人にとっては本当に魅力です。特に私は東京生まれ、東京育ちだから余計思うのかもしれない、それからやっぱり一次産業、農林漁業のそれぞれの産物がある、自分の地域はこれが名物なんです、これが産物なんです、今日高校生のみんなにも聞いてやっぱりポンと出てくるんですね、私、東京のって言われた時にやっぱり出てこない、羨ましいなと思います。そ

れらが継続してくるための知恵がある、今のお話にもありましたよね、土づくりっていうのが知恵なんだと、伝統文化があってやっぱりそこは食、祭り、祭礼、風習とか、これが続いているし、私はやっぱり人が好きなので、この地域ですね、受け入れてくださった農家さんとのつながりができたことによって、家族が増えるみたいな感じですよ、参加者もそうなるので梅収穫ワークショップじゃない時にみなべに来て農家さんとなんか色々やっているんですよ。こんなあったかいことがある、つながりがある、そして何より可能性のかたまりだというふうに感じています。最後、ビジネスという観点から言うんだったら、私は梅をやっていて梅農家さんからですね、経営の極意を教えてもらったって感じています。それをあえて簡単に言うんだったら、農家さんは教えません、それから期待しないです、干渉しないです。これすごい大事で通常ビジネスで言われていることと真逆なんです。どういうことかと手取り、足取り、ああだこうじゃなくて、大事な命に係わることとか、けがをしないように、ってことだけ伝えて、あとは信じてくれるんですよ。だからやらせてくれます、どんな危険そうなことも、自己責任ということで。それから期待しないっていうのはすごい大事で、ど素人なんで最初から役に立つなんて思われていないんですよ、だからやると超褒められるんですよ、もうありがとう、ありがとう、すごいと言って、みんなガンガン気持ちが上がっていっちゃって、とすともっと頑張るんですよ。東京にいたらほとんど褒められません、ありがとうとも言われません、すごくやっぱりみんなウキウキして帰るんですよ。最後の干渉しないというのは、余計な関わりを持たないけど、すごく見てくれるんです、ちょっと困ったり、ちょっと危ないとか、ひとりになっていると思ったらさりげなくグループに入れてくれたりだとか、あ、これってすごいことだなんて、こんなことを私は学んでいるので、今やですね、経営の学校は農村にあると思って、ある活動も始めたりしています。そんなようなことでしょうか。

【小谷】 ありがとうございます。梅収穫ワークショップの農家さんはすごく意識が高い、素晴らしい農家さんだろうと思って、いっばうで農業、農村取材していますと、昔、棚田オーナーで接待疲れという言葉があって、来てくれるのは嬉しいけど地域が疲弊してくると、来るためのおもてなしが大変だという部分があって、おそらくその仕組みというんですかね、どうして農家さんがそんなにいい農家さんが笑顔で受け入れてくれるのか、あるいは接待疲れにならない、いろいろ事務局が工夫されていると思いますけどその辺、ちょっとコツを。

【島田】 それ、すごく大事なことで2つあると思います。まず1つはこれを始める時に私たち運営は地元のことを一切知らないですし、農家さんとのつながりもないから、地元の若手の地域をよくしたいことにパッションがある3人組、私はみなべ仲間と呼んでいるんですけど、その彼らが動いてくれて、この農家さんなら受け入れてくれるだろうということで、実は最初7軒の農家さんにOKを取り付けてくれたと、そこからの話なんですけど、最初にいいよって言ってくれた農家さんですら、やっぱり怖かったって、都会からこんな大変な作業を無償でやってくれるなんてリハビリが必要な人がやって来るに違いないと、刑務所から出てきたんじゃないとか、精神的にどうなんだって思っていたけど、その心配は初日にもう払拭されたと、本当にみんないい人が毎日入れ代わり、立ち代わり、いろんな人が来てくれて本当に楽しくて涙が出たんですけど、農業人生で一番楽しい6月だったと言ってくれたんですね。じゃあ、これがどうしてできたかということをあえて考えると、最初から大事にしていたのは来て下さるマインドセットのところは徹底して、こういう人は来ないでください、こういう人はぜひウエルカムというのをしました。これ全部、自腹なんですよ、交通費から宿泊費から、何のアレンジもしないんです、アレンジするのは農家さんとのマッチングだけ。なんでこういうことをしたいのかというパーパスを伝えるのと、私たちはお客さんじゃないと

いう話と自分たちが何気なく言ったりやったりすることがその地域の皆さんが大事にしている伝統や風習を傷つけたり犯すことがあるかもしれないからそこをしっかりと、それから農家さんたちにはまさにそのおもてなしも一切いりませんと、私たちは作業させていただきにありがたい、ど素人だけれどもちょっとでもお手伝いになったらいいと思っていますと、だから何も要らないと言っても最初ですよ、やっぱりすごい気を遣っていて。でももう何もなくなりました、ただやっぱり、この梅、持って行ってとか、この梅干しをあげるよと言って、またそれが嬉しくてリピートが増えている、そんな感じがあります。

【小谷】 なるほど、ありがとうございます。改めてルール作りの部分と中間支援組織と言いますかね、間に入る人という部分が、マッチングだと思うんですけど、そういう間に入る中間メディアという存在が大事だというふうに思いました。その流れで言いますと里山まるごとホテルはまさにコンシェルジュ、御用を聞いて資源をといてその間に入っている拠点になっておられるんだなと思います。

それでは時間になってしまいましたので、最後に皆さんから、これからそれぞれの取り組みの中で希望、将来に期待する思い、抱負を、これからどんな風にしていきたいか。それでは、順番を変えましょうかね、続いちゃうけど島田さん、未来に向けてお願いします。

【島田】 今後、やりたいと思って、もう始めていることでもあるんですけど、ひと言でいうと積極的にその地域に関わってほしいと、ターゲットは特に都心の人、地域のウェルビーイングが上がる日本全体のウェルビーイング全体が上がると思うので、私はそれをやりたいと思ってこの辺のことをこれからはしていこうと思っています。その実例は、例えば実は能登でやっている木こりの仲間5人組でGOEN(ゴエン)というチームを作っているんですけど、このGOENのみんなと一緒に

にやらせてもらっている活動があって、それはTUNAGUというプロジェクトを今年からスタートしました。これは地域を活性するリーダーを育成する人材育成の研修プログラムで、これは事業としてやっています、ここに書かれている4つの地域で今年スタートして10月に事前研修、今のマインドセットなどをしっかり7時間オンラインで勉強してもらってから、11月から実地研修が始まります。この地域でスタートしておりまして、4地域でトータル15日間の実地研修をやって事後研修もやって関わった地域にどんどん積極的に関係人口になっていこう、その地域の経済活動をリモートでも構わないから、移住しても移住しなくてもいいし、完全リモートでもワークショップでもいいからやっつけていこうということをしていきます。なので人材育成、ここはすごく関心があります、一次産業ワークショップを今日、話したんですが、これを企業のトレーニングの中に入れてもらおうと思って、東京を中心に大企業の人事部長や研修の人たちと話しているんですけどね。これ最後なんですけど、これがこの1週間、2週間で起きたことの写真をまとめたものですが梅ワをやり、人材育成をやりながら、気づいたことは地域のいろんな方とのつながりが輪のように広がっていている、これが結局、町づくりにつながっていくという感覚を初めて持っている気がするんですよ、例えば中高生が来てくれるとか、そのご両親様が先生と共に話を聞きに来てくれるとか、中学校の先生がウェルビーイングの話をして言ってくるとか、。今、ニホンミツバチの話が出てきましたけれども、梅システムもニホンミツバチがすごく大事でその巣箱をみんなで作るとか、梅のラーメンを開発しましてウーメンという名前なんですけど、これを作ってみんなで食べに来てもらうという試食会をやったりだとか、このようなことがスタートしているので地域の方とこういってことを広げていけたらなど、これが私の今後の展望になります。ありがとうございます。

【小谷】 ありがとうございます。ワークショップ



ン、ワークとバケーション。労働だけでもない、楽しみ、バケーション、両方をあわせた、それを一次産業と言う取り組み。島田由香さん、ありがとうございました。

それではお願い致します、今野さん。

【今野】 紅花は原産地が地中海地方と言われておりまして、そこからシルクロードを渡りまして日本に伝わって1300年になります。紅花が栽培されているのは紀元前2500年前と言われていまして4500年ものほかなる時を超えて山形に伝わっている、これを守ってくれた先人にも感謝すると共に、今、日本農業遺産に認定をいただいております、その名に恥じないように、赤の色素の強い伝統の紅餅をきちんと作って後世

につなげていきたい、こういうふうにも思っております。そして今世界農業遺産を目指していますので、できたら世界の方々と交流をこれからさせていただきたい、何千年もかけて日本に伝わってきた紅花ですので途中、途中の地域でもきっと紅花の物語、言い伝えがあるんじゃないかと思っております。これらを契機にそういった人々と交流、さらには日本の紅(あか)というふうに申し上げましたけども、紅(あか)というのは特別な色だそうで、太陽の色、血の色、火の色、人間になくはない特別な色、ステータスであり護身の色でありということだそうです。ヨーロッパの人から見ても紅、紅花の紅(あか)というのは憧れの色だと言われてます。シャネルやそういったヨーロッパの化粧品会社の方々も日本の紅花の紅

(あか)を注目しているということですので、ぜひこれから情報発信をしながら世界との交流、そして世界の宝物にしていきたいというふうにも思っています。

【小谷】 ありがとうございます。今日も冒頭で高階くれない太鼓の演奏がございましたが、くれないはまさに山形の紅花の今野さんを歓迎する思いがあったと思います。私も今日は紅(あか)の紅花の染めをいただきました。ありがとうございました。改めて平和のシンボルでもある、情熱の紅(あか)でもある紅花の取り組みをありがとうございました。それでは最後になりました、能登の山本さん、お願いします。

【山本】 本当に素晴らしいパネルディスカッションだと思っていて、今野さんの昔ながらのものを引き継いでやっている姿とか、島田さんのワーケーションの話とか、本当にワーケーションの話が刺さって携帯でメモしながらお話を伺っていたんですけども、うちのレストランが茅葺き屋根というお話を先ほどしましたけど、先日11月は茅葺き用の茅を収穫する時期なんですね、実は僕が移住した9年前って600束ぐらい茅が刈れていました。私のところで、2棟の茅葺き屋根を管理しているんですけど、それを管理するには約300~400束、年間で必要だというふうに計算されているんですが段々と高齢化、過疎化が進んでいまして、昨年が300束と、もうギリギリですね。そして今年さらにメンバーが減ってしまっ

100束から200束取ればいいんじゃないかという状況まで、結構危機的状況を迎えているんですけど、先日、仲間の40代のメンバーと茅刈りの準備をしていて、その人は役所職員で自分の時間を使って参加してくれているんですけども、週1回、4～5人集まってやる作業、楽しいねってような、まさにウェルビーイングな話をしたなと思ってまして、ぜひ茅刈りワークショップもやってみたいと思いつきながらお話を伺っていたんですけど、本当にそういうふう仲間が集まることとか、普段と違う作業をすること、しかも地域の役に立つとか、誰かの役に立っていることはまさにウェルビーイングにつながるんだなっていうことを先日感じたので、今、本当にお話が刺さっておりました。

そういった中で、今後、僕がやりたいこととして3つ、逆に地域の事業者側としてやりたいことがあります。まず一つは働き方を変えていくことです。実は起業してから4年目くらいまでは飲食店を週6で動かして現場に立っていました。あれ、里山の暮らしをやりに来たのに、俺、何やってんだらうって、段々気づいてきました。全然、自分の畑も世話できず、お前の畑は野菜じゃなくて雑草ばかり育てているなと周りの人から言われながら「いや〜」って言いながらやってたんですけど、それを週休1日増やしまして意識的に自分の時間を取るようにして、その結果、仕事のパフォーマンス、スタッフに対する言動のあり方、良いふうに段々と変わってきているのをすごく実感しています。さらにもう一歩進めていきたいというふうに感じています。実はこの冬から能登町に副業をしにまいります。蔵人になります、週3で。数馬酒造さんという蔵のところでやります。冬ってやっぱり観光業にとってマイナスな時期で、能登で冬ってなかなか集客が難しいと言われております。逆に冬が主生産の酒造りは今人手が不足している。じゃあ、これ、マッチングできるんじゃない、しかも僕はお酒が大好きで、いつか自分でお米を育ててお酒を作りたい、自分でオリジナルのお酒を作りたいという夢があったので、そんな話を数馬酒造の数馬嘉一郎社長と、ちょう

ど同じ年なんですけれども、したら、じゃうちで働けばいいじゃんみたいな感じで話がまとまりまして、実は今月末から3か月間、週3で働きに行きます。社長が副業する会社、新しいですね。それにあわせて、飲食チーム、より強くしていきまして、来年度からは僕自身と妻が朝の9時から12時までは自分たちの田畑とか里山に関わる時間を作りながら働けるようなチーム体制をつくっていくこと。もちろん、僕たちだけじゃなくて、スタッフが望めばそういうことができるような環境をどうやって作っていけるかということを考えていきたいと思っています。意識的に時間を取って働くことと暮らすことが一緒にあるような、そんな働き方ができないかと考えております。

やりたいこと2つ目は、やりたいことをやるためにももちろんチーム作りも大事ですし、もう一つはより高付加価値な事業を通して売り上げを上げていくこと。現在うちの宿、先ほど紹介した1泊2食ダイナーとお散歩、朝食が付いているプランですと大体2万5000円から2万8000円ですね、だいたい農家民宿ですと1泊1万から1万2000円でも高いと言われてはいますが、それをだいたい倍のお値段、でも満足度は楽天トラベルで5段階中4.9までいただいているんですけども、こういったことを維持しながら棟数を増やして今3棟まで、来年度リノベーションを行いながら、古民家のリノベーションはワークショップ貸しでもできるなとか思いながら聞いてましたが、来年さらに2棟、宿を増やしていくことで自分たちの経営状況を良くしてそういった投資ができる状況を作っていく、これがやりたいことの2点目ですね。

そして3点目としては仲間を増やしていくことです。実は今年度関東から私たちの地域で民泊をやりたいという方、そして移住して元々関東でイタリアンをやっていた方がお店をやりたいという話で相談をいただいて、ひとは物件が決まって、もう一人はなかなか物件が決まらなくて難しいというところで苦慮しているところではあるんですけども、そういった方を私たちの事業を通してこの地域を知ってもらい、泊まることを通してファンを増やしたりしながら仲間を増やして

いきたいと思っています。東京、大阪から毎年通ってくれている人たちもいまして、その人たちが今年から能登の「いしる」という調味料を使って新しい商品開発をしようという動きが出てきたりしています。本当に狙った動きというわけではなく、その時、その時の本当に来ていただいた方たちとの関係性を大事にしていくことで、そういう動きが今生まれてきていますので、引き続き、関係性を大事にして関係人口を増やして仲間を作っていく、そんなことを今後も取り組みたいと思っています。能登の未来は明るい、可能性がたくさんあると思っていますので今後も皆さまと共に一緒に取り組んでいきたいと思っていますのでまたよろしく願いいたします。

【小谷】 能登の未来は明るいという、未来に広がる話をありがとうございます。お隣で今野さんがまさに30年前のご自分を見ているようなまなざしで温かくご覧になっていらっしゃいましたけど、今野さんにさっき伺ったのはずっと紅花30年やってきた中でも、やればやるほど先人へのリスペクトが生まれているという話で、改めてこの農業遺産、知れば知るほど尊敬したり、地域を大事にする、誇りを取り戻す、そういうことにつながるというふうに思います。皆さん交えてお話を伺ってまいりました。里山資源、地域資源とは何か、何を宝にしてどのように磨いていくかということから始まりました。どうぞ、もう一つ、どうぞ、どうぞ。

【山本】 ごめんなさい、もう1個だけ。完全に思い付きの部分なんですけど、先ほど馳知事が行政は環境を整えることが行政の仕事だとおっしゃっていた話からですが、先ほど僕、働き方を変えたいという話をしたんですけども、そういう里山里海と共にある働き方とか副業をする企業を応援する新しい枠組みとかもあることで、あつ石川、世界農業遺産の地域に行くと、例えば週4時間は普通に働きつつ、4時間は別の仕事をする、そういった柔軟性のある多様な働き方ができる地域づくりというのは人を惹きつける

ひとつの要素になるんじゃないかなって思ったので、ぜひ自治体の皆さま、是非そういった企業を応援するような枠組みも考えていただけたらいいのかなと思ったので報告しておきます。

【小谷】 まさに今日発足しました農業遺産の連携会議ができましたので、是非農業遺産の使い方、活用の仕方として今のご意見を参考にさせていただきたいと思っております。今日はたくさんの方の日本農業遺産、そして世界農業遺産の地域からも皆さん参加をいただいております。里山資源をどう活かすかということで、働き方、働くということが大きなテーマとなったような気がいたします。農業遺産の認定要件の農業システムの活かし方の中に多様な主体の参画というのがございます。もちろん生産者に頑張ってもらうわけですけども、その周りの人たちをさまざまに巻き込んでいくという働き方ですね、働くという言葉は旗をラクにするという言い方もありますけれど、皆さんの話をきいていて畑、農地そのものをラクにする、どうしてもやっぱりこの農業というのは人間が農地、土地とつながっている、農地も生き生きするから、地域が生き生きするから私たちも生き生きすることができる、人と土は離れていないんだということを再確認したというふうに思いました。

そして人と人をつなげるということですね、よく都市農村交流と言いますが、これからの時代はまさに社長自らいろんな仕事を持つ時代なわけですから、都市と農村の人が交流するんじゃない、ひとりの人間が都市でも働くし、農村にいる時もあるし、そういうふうな多様な異業種交流が自分のなかで一人ずつの中でできていけば、新しいイノベーションは、最大のイノベーションは人と人のつながりだというふうに思いました。長くなりましたが農業遺産を里山資源としまして活性化につきましてお話をいただきました。改めて山本亮さん、今野正明さん、島田由香さんに大きな拍手をお願いいたします。3人の皆さま、どうもありがとうございました。

閉会式

閉会あいさつ



能登地域 GIAHS 推進協議会副会長
能登町長

大森 凡世

皆さん、お疲れ様でございます。非常に中身の濃いパネルディスカッションじゃなかったかなというふうに思います。今日、認定地域の遠方の方もご参加いただきまして感謝を申し上げます。まず国連大学の渡辺所長によります基調講演、そして農業遺産の地域が持つ魅力と価値を活用してその地域の活性化に取り組んでおられる方のパネルディスカッションということで、認定を活用したさらなる活性化に向けた取り組みの気運醸成が図られる有意義なシンポジウムになったのではないかと考えております。加えて、認定地域の高校生によります取り組み発表もございました。次世代を担う高校生が他の地域の高校生との交流を通じて、世界農業遺産の保全と活用に理解を深めて、自分たちが住むその地域の持つ魅力や課題、そして未来につなげるためのさまざまな取り組みについて自ら考える貴重な機会にもなったというふうに思っています。

農業遺産に認定された地域は、近年、農業の担い手の減少によりまして地域の保全や継承が難しくなっている状況が続いております。この農業遺産の認定をきっかけに各地域が有する魅力や価値が再評価され、農業の振興や他の産業との連携などさまざまな活性化の取り組みにつながっていくことを期待しております。また、こうした取り組みにつきましても認定地域が連携をし、魅力の発信などの取り組みを共同で実施することで相乗効果を発揮することが期待されます。本日、発足いたしました認定地域の連携会議を通じまして、国内の世界農業遺産と日本農業遺産の各認定地域がそれぞれの取り組みを学び合い、お互いに切磋琢磨し、農業遺産の価値をますます高めていくことを願っております。

明日は能登の各地を巡るエクスカージョンも開催されるということで、ご参加される皆さまには能登の里山里海の魅力をご堪能していただければ幸いです。

結びに、本日ご参加いただきました皆様方のますますのご健勝とさらなるご活躍をご祈念申し上げて閉会にあたってのご挨拶とさせていただきます。長時間にわたりお疲れ様でした。ありがとうございました。

2024年度 「東アジア農業遺産学会」 開催地からメッセージ

農業遺産シンポジウム閉会式では、2024年度に「東アジア農業遺産学会(ERAHS)」開催地に決定した岐阜県からPRと意気込みの発表もありました。

メッセージ



岐阜県農政部
里川振興課係長

塚原 清香氏

本日は農業遺産にまつわる講演、そしてパネルディスカッションなど貴重なお話を聞かせていただくことができました。基調講演をいただきました渡辺様をはじめ、高校生の皆さん、パネリストの皆様、本シンポジウムに携わっていただきました関係者の皆様には改めて感謝を申し上げます。また、「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会様、能登地域 GIAHS 推進協議会様におかれましては、今回このような挨拶の場を設けていただきまして感謝申し上げます。本日は国内の世界農業遺産と日本農業遺産の認定地域が加入する「農業遺産認定地域連携会議」が発足されたということでセレモニーを開催して頂きました。お互いの認定地域の活性化を目的としまして岐阜県もその一員として引き続き認定地域間の連携に取り組んでいきたいと思っております。

直近でいきますと岐阜県で10月末に開催しました「岐阜県農業フェスティバル」というイベントがありましたが、そちらにおきまして隣県の石川県、滋賀県と連携して各地域のPRおよび特産品の販売を実施させていただきましたところ、とても盛況でございました。今後もこうした取り組みをさらに進めてまいりまして、皆さまと共に農業遺産のPRをし、認知度の向上に努めていきたいと考えております。

さらに今年の6月に中国において開催されました「第7回東アジア農業遺産学会」で、来年度日本での開催地が岐阜県に決まりました。日本の世界農業遺産および本県の世界農業遺産である清流長良川の魅力を国内外に発信するべく、今、準備を進めているところでございます。会場、そして時期についての詳細は固まっておりますのでこの場ではお伝えすることができませんので、固まり次第、皆さまにご案内をさせていただきますのでよろしくお願いたします。来年度の学会が皆さまにとりまして非常に有意義なものとなり、しっかりと日中韓における認定地域の交流が図れるものとしていきたいと思っておりますので、皆さまには是非参加をお願いしたいと思います。来年度、岐阜県で皆様にまたお会いできるのを楽しみにして、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

歓迎レセプション

歓迎レセプションでは、能登地域の食材を使用した料理を提供するとともに、能登を代表する伝統芸能「御陣乗太鼓」を披露し、シンポジウムに参加いただいた県内外の参加者に「能登の里山里海」の魅力を満喫していただきました。

■ 参加者数：45名 ■ 参加費：8,800円/人



会場内



吉村光輝穴水町長の歓迎挨拶



和田内幸三石川県議会議員による乾杯発声



高井美穂徳島県三好市長による中締め



当日の料理とメニュー



能登を代表する伝統芸能「御陣乗太鼓」

- 食前酒 柚子みつはちみつ入りノンアルコール
- 酒の肴 なまこ羹和え
- 前菜 龍登野菜「能姿むすめ大根」
- 菜 栄螺いしる旨煮
- 梅水晶 恵比寿
- 凌ぎサーモン寿司
- 加賀レンコンチップ
- 冬の味覚 ずわい蟹
- 光吸い 海豚白子豆腐 雪輪南瓜
- お造り 旬の魚の盛り合わせ
- 食べる醤油を添えて
- 田舎料理 鱈 大根 田舎煮
- 石川産ジャンボ椎茸
- 蒸し物 蟹のビスク 和風ロワイヤル
- 牛蒡ワイン煮
- 小芋 蟹みそ
- 地野菜添え
- 台物 合鴨ロース 朴葉焼き
- 金時草きのこ
- 山葵唐辛子味噌
- 能登産 棚田米
- 磯の香なめこ味噌汁
- あかもく 黒海苔モズク
- わかめメカブ
- 留椀
- 御飯 能登産 棚田米
- 香の物 季節野菜
- デザート 胡麻プリン 能登ミルク餡

エクスカージョン

シンポジウム翌日には、シンポジウム参加者を対象に、世界農業遺産認定後の能登の取組や成果について理解を深めるとともに、能登の魅力を発信するエクスカージョンを実施しました。

奥能登コース

奥能登の農林水産業と文化

穴水町

ボラ待ち槽



輪島市

白米千枚田



珠洲市

時を運ぶ船



珠洲市

スズ・シアター・ミュージアム〈昼食〉



能登町

イカの駅つくモール



能登町

柳田植物公園合鹿庵



中能登コース

中能登の農林水産業と文化

七尾市

和倉温泉お祭り会館



中能登町

能登國二ノ宮天日陰比咩神社



志賀町

道の駅とぎ海街道「さくら貝資料館」



羽咋市

千里浜レストハウス〈昼食〉



宝達志水町

近岡屋醤油株式会社



- 参加定員：各コース25名
- 参加費：5,000円/人
- 参加者数：奥能登コース 25名
(うち高校生12名)
中能登コース 21名
(うち高校生8名)

制作物・配布物

●ステージ上一文字看板(W5400×H600)



●チラシA4サイズ



●外看板(W900×H1800)



●会場内サイン



●パンフレット(A3 2つ折り)



●受付看板



農業遺産認定地の連携を確認する
馳知事（中央）＝七尾市和倉温泉



●2023年11月11日付
北國新聞朝刊

農業遺産を次世代に

七尾でシンポ 認定地で連携会議発足

国連食糧農業機関（FAO）の世界農業遺産や農林水産省の日本農業遺産に認定されている石川など21県と32地域は10日、「農業遺産認定地域連携会議」を発足させた。七尾市で発足式を兼ねたシンポジウムが開催され、農業遺産の価値向上、情報発信へ連携することを確認した。

同市和倉温泉の旅館「あえの風」で開かれたシンポジウムに、約220人が参加。認定地を代表して馳浩知事と徳島県三好市の高井美穂市長らが連携会議発足の意義を説明し、馳知事は「農業遺産を次世代につなげるきっかけになる」と期待した。高橋光男農林水産政務官、平蔵豊志県議会議長、能登地域GIAHS推進協議会長の茶谷義隆七尾市長があいさつした。

国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットの渡辺綱男所長が講演。七尾東雲、航空石川など県内外11高校が里山里海の保全活動を発表し、パネル討論会も行われた。

連携会議は認定地の持ち回りで定期的に関き、物産展での共同PRや、農作物の6次産業化商品の開発などで連携していく。

高橋政務官は輪島市の古民家レストランや千枚田を視察し「各認定地の知恵を共有して連携できるよつに支援していきたい」と述べた。11日は能登地域を巡るエクスカーション（小旅行）を行う。